集計結果５

地域における豊かな社会関係資本（人間関係）づくりの取組事例に関する調査結果

取組事例		P
取組事例１	（民間団体による居場所づくり等） 新居浜子ども食堂中村松木店 新居浜子ども食堂中村松木店実行委員会	５－２
取組事例２	（市委託による子どもの居場所づくり等） 輪い和い「親子広場」「子ども広場」 今治市・今治市教育委員会（委託） ＮＰＯ法人輪い和い	５－６
取組事例３	（公民館・まちづくり協議会による居場所づくり等） 久米地区孤食対策事業「ふれあい食堂」 松山市久米公民館 久米ふれあいタウンづくり協議会	５－11
取組事例４	（放課後子ども教室） 放課後子ども教室「立岩っ子クラブ」 松山市教育委員会 立岩っ子クラブ実行委員会	５－13
取組事例５	（家庭教育支援） 大洲子育てサポート“そよ風” 大洲市教育委員会 大洲子育てサポート“そよ風”	５－15
取組事例６	（学校支援地域本部） 吉中未来塾 宇和島市教育委員会 吉中未来塾	５－17

【取組事例１】

新居浜子ども食堂中村松木店

【視点】
子どもの居場所づくり　生活支援　学習支援　地域コミュニティ活性化

取組団体名	新居浜子ども食堂中村松木店実行委員会
	〒792-0041　新居浜市中村松木１-13-50
代表者名	（共同代表）広瀬　香織、柳瀬　泰和
活動場所	日本キリスト教団　新居浜教会
対象者	教会の周囲 1.5 ㎞圏の小中学生（新居浜市立中萩小学校・金栄小学校の校区の一部）（例外有、高校生以上も可）
実施日時等	基本的に毎月第４金曜日　午後５時～
活動資金等	参加費：子ども（高校生以下）100 円　大人 500 円（申込制）

１　趣旨・目的

○　子どもたちの健やかな成長を見守り、地域のつながりを深める。
○　経済的に困難な子どもたちに格安で食事を提供するとともに、学習支援や芸術文化体験の機会を提供する。

２　活動の内容

（1）　「新居浜子ども食堂中村松木店」立ち上げまでの経緯

代表者である広瀬氏は 2004 年に新居浜教会に着任した。当初から教会を子どもたちの居場所として開放していた。当時、友達にいじめられた男の子が教会に逃げ込んできて保護したが、その子は教会の冷蔵庫を勝手に開けていた。その後も関わり続けたが、家庭環境の影響から学習習慣が身に付いておらず、勉強が苦手で不登校傾向であることも分かった。

教会に遊びに来るとまず冷蔵庫を開け、中の物を食べ尽くす子どもは他にもたくさんいた。何とかしたいと学習支援をしたり、一緒に料理をしたりしながら関わってきた。そして、悩みを抱える子どもたちのために、よき相談相手になれるようにカウンセリングの勉強をし、資格を取った。子どもだけではない。突然、生活に困っている大人が助けを求めて訪ねてくることもあり、一時的に寝食の提供もしてきた。現在、貧困問題がクローズアップされているが、広瀬氏は 10 年以上も前から生活に困窮する人たちに思いを馳せ、支援してきた。

昨年の 12 月には、念願の「教育館」が教会の隣接地に完成した。これは、広瀬氏の「より充実した子どもたちの居場所を作りたい」という考えに賛同した教会関係者、教育関係者、福祉関係者等からなる「賛同者の集い」が７年前か

ら実現に向けて活動し、全国からの寄付によってできたものである。教育館では、宗教の枠を超えた地域に開かれた子どもたちの居場所・教育の場を目指し、映画の上映、講演会、英語教室の他、生活困窮者のためのフードバンク活動、お風呂の提供などを行っている。また、いつでも広瀬氏がカウンセリングできるようにカウンセリングルームも備えている。

そのような活動をしている時に、「子ども食堂」が全国的に広がりを見せ、松山にもできることを知った。これは、今まで自分たちがやってきたことと相通ずるものがあると思い、「新居浜子ども食堂中村松木店」開設に向けて動き出した。最初は 12 名のボランティアと組織メンバーであったが、メディアに取り上げられてから賛同者や協力者が増え、現在はスタッフ約 30 名で運営している。

（２） 活動の実際

新居浜子ども食堂中村松木店の第１回は、平成 28 年８月 26 日（金）11 時から 14 時に開催され、中学生以下 10 名、高校生７名、大学生１名、大人 28 名、合計 46 名が参加した。午前中は、学習支援、電子黒板による英語教室、絵本の読み聞かせなどをし、昼食は、流しそうめん、唐揚げ、おにぎり、かぼちゃサラダ、スイカ割り、食後は腹話術、ピアノとヴァイオリンのミニコンサートと盛りだくさんの内容であった。食事の提供にとどまらず、学習支援や芸術文化体験をプログラムに入れることが、新居浜子ども食堂中村松木店の特徴であると言える。

第２回は、９月 30 日(金)17 時から開催。中学生以下 13 名、大人８名、ボランティア（高校生６名、 大人 10 名）、教会関係者７名の合計 47 名が参加した。メディアに多数取り上げられたことで、市内外からデザートやお米、野菜、お菓子、水素水生成器などの差し入れがあり、子ども食堂への理解者、協力者が広がっている。

（３） 運営スタッフの思い

ボランティアリーダーとして活動しているＨ氏は、松山子ども食堂のプレオープンイベントに参加し、自分も何かしたいという思いを強くしていた。その矢先、新居浜で子ども食堂を立ち上げるという話を聞き、すぐにボランティアとして加わった。シングルマザーの苦しさ、お腹を満たすことの大切さを身をもって知っているからこそ、今の自分にできることをしたい。Ｈ氏は、調理や配膳を切り盛りするとともに、学校や民生委員とのパイプ役となり活躍している。

教会役員で、教育館の活動をサポートしてきたＯ氏は、子ども食堂の趣旨に賛同し、スタッフに加わった。活動を通して人間関係が広がり、生きがいを感じている。また、食事を通じてできた関係は特別なものであると言う。

保護司をしている男性は、「街で見かけるやんちゃな子どもたちは、とにかくお腹を空かせている。」と言う。家に帰っても親が不在で食べるものがなかったり、自分の居場所がなかったり、それらを紛らわせるために非行に走る子がいるように感じている。子ども食堂でお腹を満たし、人の温かさに触れ、自分は一人ではないと感じることができれば、寂しさや不安から解放されるかもしれない。

子どもの貧困問題が社会問題として取り上げられ、子ども食堂は全国的に広がっている。メディアで取り上げられていることで、関心をもつ人が増えている。新居浜子ども食堂中村松木店と地区名を付けているのは、今後、新居浜市内の他地区にも広がってほしいという願いが込められている。

（4） 子ども食堂に集まる子どもたち

ひとり親家庭の子どもだけでなく、マレーシアや中国出身の子どもたちも来ている。中には一人暮らしの大人もいる。

ある子は、母親を説得して塾を休んでまで参加した。普段の家庭での食事が寂しいと感じているようだ。子ども食堂に来てたくさんの人と触れ合いながら食事をし、表情が明るくなって帰っていった。コミュニケーションが広がることで、子どもが自信をつけてきたと母親から子ども食堂に対して感謝の言葉が寄せられた。

３　成果と今後の展望

（1） 成果

生活困窮者への支援、子どもたちの学習支援や芸術に触れる機会の提供など、新居浜教会の牧師として広瀬氏は献身的に活動してきた。それに賛同する人たちが集まり、全国からの寄付もあって教育館が完成し、宗教を超えた活動へと広がった。そして、新居浜子ども食堂中村松木店がオープンすると、ボランティアをしたいと思いながらも、自分を生かす場がなかった人たちが、子どもたちのために、地域のためにと参集した。毎月の子ども食堂開催に向けた打合せ会や反省会では、子どもたちを取り巻く環境や現状について、様々な立場から意見が出される。元教員、社会福祉士、保護司、管理栄養士、看護師、市議会議員等々、専門的な見地からの意見交換は、子どもや地域を軸にした大人の学び場となっている。

新居浜子ども食堂中村松木店は、食事を提供するだけではなく、学習支援や芸術体験をプログラムに入れ、さらに幼い子から高齢者までが笑顔で交流できる雰囲気をつくり出している。子どもたちだけでなく、子ども食堂に集ったみんなが、温かい気持ちで心地よく帰途についている。今後、人が人を呼び、さらに多くの人がこの場に集うようになっていくだろう。

（２） 今後の展望

フードバンク愛媛からの援助や個人的な寄付・物資提供により、運営はできているが、来年の活動に向けて補助金の申請をしたり、市民クリスマス（新居浜市後援）で募金を集めたりして活動資金を確保する計画である。それとともに、子ども食堂のバザーや活動を広めるための講演会なども計画している。

また、高校生ボランティアを大学に推薦できる制度が教会にある。それを使うことで、経済的に苦しい生徒の教育の場を広げることができ、貧困対策になると考えている。

広瀬氏は「ロゼト効果」について教えてくれた。1950 年代のアメリカペンシルバニアにあるコミュニティ「ロゼト」の住民は、病気の発症率が極端に低く、自殺者が０人だったそうだ。ロゼトの住民の連帯感と団結は強く、お互いに尊敬と支援を怠らなかったそうである。「新居浜をロゼト効果で自殺者０の町にしたいんです。」と広瀬氏は熱く語った。「三世代が集まるような縦のつながりや、様々な職種・立場の人が協働する横のつながりを一層広げていきたい。そして、多くの人が生きがいを感じ、有機的につながり合って生きていってほしい。」新居浜子ども食堂中村松木店は、大きな希望をもって活動を続けていく。

【取組事例２】

輪い和い「親子広場」「子ども広場」

－遊びを通した健全育成　地域の子育て応援活動　地域のきずなづくり－

【視点】

子どもの居場所づくり　家庭教育支援　学習支援　体験活動

取組団体名	今治市・今治市教育委員会（委託） ＮＰＯ法人輪い和い
	〒799-2203　今治市大西町新町 734-10
代表者名	菅　惠志
活動場所	輪い和い（旧大西幼稚園跡）
対　象　者	「親子広場」 おおむね３歳までの児童及び保護者 「子ども広場」 未就学児童（保護者同伴）　大西小学校１～６年生児童
実施日時等	「親子広場」 月曜日～土曜日（10 時～16 時） 「子ども広場」毎週土曜日（13 時～17 時） 夏休み（８時 30 分～11 時 30 分）10 回開催
活動資金等	参加費：無料　　登録制 「親子広場」：今治市地域子育て支援拠点事業 「子ども広場」：学校・家庭・地域連携推進事業（放課後子ども教室）

１　趣旨・目的

○　気軽に集い、安心して過ごせる子どもの居場所づくり
○　創造豊かな遊びや体験を通した健全育成
○　地域で行う子育ての応援活動

２　活動の内容

（１）　活動の概要

○　平成 22 年、今治市の大西地域活性化事業として、大西地域活性化推進協議会が中心となり、休園している大西幼稚園の施設を借りて、子育て子育ち支援の活動を始めた。たくさんの住民がボランティアで整備を行い、名称を住民ふれあいセンター「輪い和い」とした。現在、「ＮＰＯ法人輪い和い」が今治市から委託を受けて運営している。

地域における豊かな社会関係資本（人間関係）づくりの取組事例

○【輪い和い　親子広場】

通常	各種イベント	異年齢・住民交流活動
・親子ふれあい遊び ・情報交換 ・ふれあい歌 ・絵本の読み聞かせ ・お誕生会（月１回） ・身体測定、健康相談 等	・専門スタッフによる育児相談 ・３Ｂ体操 ・英語遊び ・ベビーマッサージ ・木のおもちゃ ・ハンドマッサージ　等	・「子ども広場」とのふれあい交流（土曜日） ・ハロウィンパーティー 等

・３歳児までの親子を対象とし、親子のふれあい遊びを中心に、情報交換や育児相談、各種講習会や体験活動等を行っている。

・「地域子育て支援拠点事業」として今治市健康福祉部子育て支援課が所管。

○【輪い和い　子ども広場】

にこにこ教室	自由遊び	季節に合わせた行事
・手芸 ・手作りおもちゃ ・英語遊び ・華道 ・木版画 ・囲碁 ・星空観察 ・学習支援	・工作 ・オルガン ・卓球 ・ボール遊び　等	・相撲大会 ・お月見団子作り ・ミニ文化祭 ・史跡めぐり ・しめ縄作り　等
米作り	**異年齢・住民交流活動**	
・田植え ・草取り ・稲刈り ・脱穀 ・飯盒炊さん	・「親子広場」とのふれあい交流（土曜日） ・輪い和い子ども夏祭りでの出店やパフォーマンス披露	

・就学前の親子と大西小学校１～６年生の希望者を対象とし、子どもたちが気軽に集い、様々な遊びや活動ができる居場所づくりを行っている。

・「大西放課後子ども教室」として、今治市教育委員会社会教育課が所管。

① 屋根のある公園（親子広場）

親子広場には、毎日 20 組ほどの親子が来る。他の家族とのおしゃべりやコミュニケーションを楽しむ人、スタッフに話を聞いてもらいすっきりして帰る人がほとんどである。中には、周囲とは積極的に関わらないが、何度も訪れる親子もいる。スタッフは、どんな親子にも温かな眼差しを向け、「屋根のある公園だと思ってね。」と優しく語りかける。そして、利用者が求めている

ものを感じ取りながら接している。

里が遠く、友人がいなくてさびしい母親、子育てが思うようにいかずに悩む母親、仕事と家事と育児に奮闘している母親等、様々な思いをもっている母親たちがいる。そのような母親たちに対し、親子広場は、不安があればいつでも相談できる体制を整えている。また、たくさんのイベントを開催して親子での触れ合いや体験の場をつくっている。

子育ての悩みを誰にも相談できなかったり、生活に困窮しても誰にも頼ることができなかったりすることは、育児ノイローゼや児童虐待等にもつながりかねない。親子広場は社会との関係性の貧困を解決する場として、地域の親子にとって大きな支えとなっている。

② 地域の教育力を結集（子ども広場）

子ども広場の「にこにこ教室」には八つの講座がある。どの講座も、経験豊かで専門性をもった地域の人材が子どもたちの先生となっている。子どもたちの平均参加人数は約 30 名。異年齢の子どもたちが自然な形で交流しながら、活動を行っている。

活動の一つに米作りがある。無農薬での米作りを、昔ながらの手作業や機械、道具を使って行っている。田植えから収穫、飯盒炊さんまで一貫して体験を重視しており、子どもたちは昔の人の工夫や苦労を感じ取るとともに、食材に対する感謝の気持ちが育っている。

夏休みには、十日間の自習学習教室が行われている。学習アドバイザーとして元教員等の約８名が学習支援を行っている。夏休みの前半に実施することで、子どもたちは生活リズムを保つことができるとともに、学習習慣が定着し、充実した夏休みを送ることにつながっている。

夏休み最後の土曜日には夏祭りが開催される。これには、児童館、婦人会、社会福祉協議会、ママさんグループ、地域で活動をしているグループ等、たくさんの協力者があり、300 人ほどの参加者がある。子ども広場に来ている子どもたちは、お化け迷路、くじ引き、綿菓子等のいろいろな出店を開いたり、ステージでパフォーマンスを披露したりと活躍の場が設けられている。それらの計画や準備、運営等に主体的に取り組むことで、創造力や協調性等多くのことが育まれている。群れて遊び、そこから感じたり学んだりし、たくましく生きる力を身に付けていくという環境は、昔話になりつつある。だからこそ、異年齢の子どもたちが群れて何

かを成し遂げる場を意図的に設定していくことは意義深いことである。

（２） 輪い和いの運営体制と地域人材を活用した支援スタッフ

親子広場のスタッフは、傾聴ボランティアや子どもの急病への対応等の研修は受けているが、育児に関する専門的な資格はもっていない。そこで、市役所の子育て支援課の専門スタッフや主任児童委員を迎え、月 1 回の育児相談日を設けるとともに、不安があればいつでも相談できる体制を整えている。

また、各種イベントでは、地域の児童館と連携したり、専門的な指導者を招聘したりしている。隔月で行われているハンドマッサージのイベントでは、地域のボランティアの方が、小さな子をもつ母親と楽しく会話をしながらハンドマッサージを行い、参加者からは「自分の母親と話しているようだ。」「体だけでなく心も癒される。」と好評である。

子ども広場は、コーディネーター１名、学習アドバイザー８名、安全管理員４名のスタッフと、「にこにこ教室８講座」を受け持つボランティアティーチャーで運営されている。安全管理員は、日々の活動の見守りだけでなく、施設の修繕や掃除、米作り体験時の安全指導等、なくてはならない存在である。

「にこにこ教室」の各講座は、その道に長けた地元のボランティアが受け持っている。輪い和い広場のすぐ近くに、天体ドームを備えた民家があり、その家の方が星空観察の講座を担当している。天体ドームの大型望遠鏡を子どもたちは夢中で覗き込み、実際に見る月や星の様子に感動している。また、手芸や華道、木版画等の講座でも、専門的な知識と経験のある地元の講師陣に直接指導をしてもらい、子どもたちはメキメキと腕前を上げている。

地域の中に溶け込んでいる「輪い和い」には、草引きやグランド整備等、いつも地域の方々の温かな支援があり、スタッフは地元の恩恵に感謝しながら活動をしている。

（３） スタッフの願い

親子広場、子ども広場とも地域に支えられて活動自体は順調であるが、いくつかの悩みがある。

まず大きな悩みは、施設老朽化の問題である。旧大西幼稚園を借りているが、雨漏りをしたり風で屋根が飛んだりと、ところどころに傷みがある。その都度応急処置をしたり、市と交渉しながら修繕したりしているが、大規模改修はかなわない。子どもたちの安全を考えると、大きな悩みとなっている。

また、輪い和いの活動を多くの人に知ってもらいたいが、不特定多数の人が利用する目的で活動していないため、宣伝することができない。親子広場は登

録すれば誰でも利用できるが、活動自体を知らない人が多くいるのが現状である。本当に困っている人に来てもらいたいという願いがあり、主任児童委員や保健師と連携しながら周知していきたいと考えている。

３　成果と今後の展望

（１）　成果

親子広場は、幼い子どものいる母親が、子育てについて情報交換したり、悩みを聞いてもらったり、イベントで気分転換をしたりすることで、心にゆとりをもって育児ができる環境づくりに大きく寄与している。また、幼い子どもたちにとっても、自分の母親だけでなく、たくさんの大人や同年代の子どもたちと触れ合いながら過ごす時間は貴重なものである。

子ども広場では、「にこにこ広場」の各講座や米作り、夏祭り等のイベント等、多種多様なプログラムが用意され、子どもたちは学校や家庭ではできない豊かな体験を通して成長している。また、異年齢で協力しながら活動することで、協調性や規範意識等も育まれている。

（２）　今後の展望

親子広場、子ども広場ともに、スタッフ・活動プログラム・地域の理解や協力体制等、とても充実した状態で事業を展開している。しかし、保護者の理解がなければ子どもは参加することができない。本当に参加してもらいたい子どもが参加できるような働きかけをし、地域の教育力が家庭の教育力を補完できるようになればと考えている。

【取組事例３】

久米地区孤食対策事業「ふれあい食堂」

－地区内のご近所力を活用したコミュニケーションの推進と健康増進－

【視点】
居場所づくり　地域コミュニティ活性化　学習支援

取組団体名	松山市久米公民館 久米ふれあいタウンづくり協議会
	〒790-0925　松山市鷹子町 823
代 表 者 名	安永耕造 (久米公民館長・久米ふれあいタウンづくり協議会会長)
活 動 場 所	公民館内
対　象　者	久米小学校区の一人で食事をしがちな子ども・独居高齢者 地域住民 参加人数　298 名　（10 月 13 日現在　計８回実施）
実施日時等	木曜日 16 時～19 時 30 分
活動資金等	地域からの食材提供、参加費（18 才以上 100 円）、銀行からの補助金（10 万円）、赤い羽根の助成（18 万円）、寄付

１　趣旨・目的

放課後児童クラブと連携して、久米小学校区の一人で食事をしがちな子どもや独居高齢者を主な対象として「ふれあい食堂」を実施している。食後をふれあいタイムとし、公民館の図書館、大広間、視聴覚室等を開放し、参加者の交流や児童の学習をサポートする。

地域のご近所力による響（共）食をすすめ、人と人のコミュニケーションを深め合いながら健康増進を推進する。

２　活動の内容

（１）活動の概要

・平成 28 年 7 月 14 日にスタートした。
・毎週木曜日（木曜日が祝日の場合は休館）を実施予定日としており、時間は 16 時から 19 時 30 分までである。申込者は開催週の火曜日午前中までに久米公民館へ予約する。

（２）公民館とまちづくり協議会が主体となった運営体制

・公民館とまちづくり協議会が地元企業と協力のもと運営。
・久米地区内の農家や住民等が持ち寄った食材を使い、婦人部をはじめとしたボランティアの住民が調理を担当。
・松山東雲短大の学生らによる子どもたちへの学習支援。
・地元企業と連携し、市内の学校給食調理業者の若手社員有志によるバランスのとれたメニュー作り、アレルギー対策、衛生管理の指導。

（３）地域の力でつながりを醸成する場の工夫

① 子どもを取り巻くつながり

子どもたちと高齢者や地域のボランティアの方が、くつろぎながら安心して食事や活動ができる居場所となるよう努めている。高齢者との交流を促進することで、他者への思いやり、コミュニケーションの発達にも寄与できるようになる。食後には自分や周囲の片付けを行う等の役割が生まれており、自分が人の役に立っているという自己有用感にもつなげたい。

② 保護者・高齢者を取り巻くつながり

現在 18 歳未満は無料、大人は 100 円として多くの人を巻き込んで実施している。高齢者との交流を通して、地域や過去の歴史についての生きた知識にふれる機会としたい。

③ 地域のつながり

公民館、大学生、婦人部、農家、住民等をはじめとした地域のボランティア、地元企業とたくさんの人とその思いがつながり、本事業を展開している。ボランティアの募集には想定以上の申込があり、地域住民のつながりづくりの場ともなっている。

３　成果と今後の展望

（１）　成果

孤食対策事業は、昔は当たり前にあった地域の共助力をシステム化した事業である。定期的に食堂を開くことで、昔は近所の人の家でご飯を食べることが普通であった時間と空間を公民館が提供している。孤立しがちな立場にある人たちが多様なつながりをもち、団らんを楽しみながら食事をとっている。なお、活力ある子どもと時間と場を共有することで、高齢者の表情は柔和であった。「子どもと一緒に食べるのがうれしい。」との声が聞かれた。

（２）　今後の展望

児童クラブとの連携から本事業を立ち上げている。今年度は課題をつかむ一年としている。今後、学校と連携した中学生のボランティアも予定しており、子どもが子どもを巻き込んでいくことで、誰もが参加しやすい雰囲気をつくっていくことに努めていくとしている。

また、子どもの学力を保障するための学習支援については、スタッフの確保・食事前後の学習環境を充実させることを考えている。

【取組事例４】

放課後子ども教室「立岩っ子クラブ」

－地域人材を活用した学習習慣の定着・学習機会の充実－

【視点】

地域人材の活用　　学習支援　　体験活動

取組団体名	松山市教育委員会 立岩っ子クラブ実行委員会
	〒799-2419　松山市猿川原甲 49
代 表 者 名	渡部恒夫(立岩公民館長)
活 動 場 所	立岩小学校校内（主に家庭科室兼図工室）
対　象　者	全校児童
実施日時等	平日授業後～16：45（冬季は 16：30） 夏季休業中は約３週間、冬季休業中、学年末学年始休業中は３日間程度、いずれも午前中のみ。 昨年度の活動日数は年間 209 日。
活動資金等	学校・家庭・地域連携推進事業（放課後子ども教室）

１　趣旨・目的

放課後や長期休業中に小学校の余裕教室等を活用して、地域の方々の参画を得て、子どもたちとともに勉強やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動等の取組を実施することにより、子どもたちが地域社会の中で、心豊かで健やかに育まれる環境づくりを推進する。

２　活動の内容

（１）活動の概要

・宿題や自主学習（算数・漢字等のプリント学習）に取り組む。
・自主学習後、友達や教育活動推進員と関わり合いながら自由に好きな活動（オセロ、将棋、読書、トランプ、自由工作、手芸、サッカー、ドッジボール、バドミントン、一輪車、ドミノ、季節に応じた遊び等）を楽しむ。
・独居老人宅へのカード作り（日赤奉仕団事業への協力・・・年３回）
・学校長期休業中は体験活動（藍染め教室、おやつ作り、七夕祭り、ソーメン流し、工作教室、ハロウィンの仮装作り、節分の豆まき等）を実施する。

（２）地域のつながりを活用した運営体制

・実行委員会には、学校関係者・保護者の代表・地域の関係団体の代表が参加する。
・コーディネーターは、地域の実情に詳しく、学童教育に情熱を有し、各団体・保護者と良好な連携を築ける人物を実行委員が選定する。

・教育活動推進員は指導能力が高い人物を実行委員会が選定し、教育活動サポーターは、推進員が兼務するとともに地域からも募集する。
・１回あたり、教育活動推進員３名、教育活動サポーター２名を基本とする。必要に応じて増員したり、コーディネーターが参加したりしている。

（３）地域の力で全ての子どもを伸ばす

本校区は通学区域が広域にわたるため、下校時における児童の安全確保が必要であった。低学年と高学年が一緒に下校できる安全な下校方策として、平成21年度より運営され、地域に根付き、児童を地域全体で見守る安全体制につながっている。

また、一斉下校までの待ち時間の有効活用を図る上で、校区内に塾等がないことも加味し、地域人材を活用して、学習機会の提供・指導を中心に活動することとした。

【１年生の学習の様子】

３　成果と今後の展望

（１）成果

全校児童（校区外通学１名を除く）が参加登録を行い、学校での生活から継続して、地域ぐるみで子どもの成長を見守っている。異年齢の子どもたちが時間・空間を共有して活動することで、多様な関わりが様々な場面で生まれ、意見を出し合って工夫する創造性や互いを助け合う協働性、思いやりを育むことにつながっている。

また、推進員等が教員とは違った視点で児童に関わることで、学校とは違った雰囲気で宿題や自主学習に取り組むことができ、全員の児童に学習習慣がしっかり定着しつつある。体験教室では、様々な活動へ興味・関心をもった取組が展開され、地域の方とふれあうことでつながりが深まった。

（２）今後の展望

低学年と高学年の終業時刻が異なるため、高学年が学習を始める時間帯に低学年は学習を終えて、遊んでいることがある。今後、学習環境をどのように整えていくかが課題であるとしている。

また、以前は複数の大学からボランティアの参加があったが現在継続できておらず、今後は多様な人材を確保するなど、持続可能な方策を探る必要があるとしている。

【取組事例５】

大洲子育てサポート“そよ風”

【視点】

子育て　家庭教育支援

取組団体名	大洲市教育委員会 大洲子育てサポート“そよ風”
	〒795-0052　大洲市若宮 332　大洲市立喜多小学校内
代 表 者 名	吉見和子
活 動 場 所	喜多小学校２階　事務所
対　象　者	大洲市内の乳幼児から高校生までの子供をもつ保護者
実施日時等	週４回（月・火・木・金）　9:00～16：00
活動資金等	学校・家庭・地域連携推進事業（家庭教育支援）

１　趣旨・目的

近年、少子化・核家族化に伴う人間関係の希薄化等により、子育てに自信をなくしている保護者が増えている。そのような保護者は、一人で悩んでいる場合がほとんどであり、そんな保護者にやさしく寄り添う文科省の補助事業として、この「家庭教育支援事業」がある。チーム員による、相談対応や家庭教育・子育てに関する学習会、啓発活動を通して、地域全体で家庭教育を支えていこうというものである。

大洲市においても、事業実施初年度からこの事業に取り組まれ、地道な取組ではあるが着実に成果を挙げられ、全国でも顕著な活動として知られるようになってきている。

家庭の問題には、学校がなかなか入っていけないケースがあるのが現実であり、チーム員に「話を聞いてもらえる人がそばにいてくれると思えるだけで、安心できる。」と言う保護者にとっては、なくてはならない存在となっている。今後も、活動の更なる充実により、一人でも多くの保護者が家庭教育・子育てに自信を持てるよう願っている。

２　活動の内容

（１）相談対応

・平成 20 年度からスタートしている。

・相談日は、週４回（月・火・木・金）　相談時間は、９時から 16 時までとなっている。

・平成 27 年度の相談件数は、180 件（平成 26 年度：202 件）であり、今年度も同程度の相談があると予想される。
・乳幼児から高校生までの子どもをもつ幅広い保護者の身近な支援者として、より一層支援を行った結果、保護者の信頼を得られるようになった。
・市内の子どもをもつ保護者の 80%が「大洲子育てサポート“そよ風”」の存在を知っている。

（２）子育て講座の開催

・月に２回、子育て広場を開催している。（徳森児童センターと喜多児童館）
他にも、幼稚園、保育所、小・中学校等で要請に応じて開催している。
・保護者を対象に実施し、家庭教育に関する様々なテーマで、対象者のニーズに応じて具体例を取り入れながら分かりやすく話すよう心掛けている。
・講座の中にグループでの話し合いの時間を設定することにより、参加者同士が子育ての悩みを共有し、子育てへの安心感を持つことができている。
・講話だけでなく、ロールプレイを取り入れたり、茶話会形式を取り入れたりして、参加者が気軽に楽しく学べる場の提供に心掛けている。

（３）啓発活動

・毎月１回手作りの情報紙「そよ風通信」を発行している。（Ａ４版、両面刷り、5,200 部）
・市内全幼稚園、保育所、小・中学校及び関係機関（公民館、福祉担当課等）に配布している。
・内容が充実しており、読者からの評判も良い。
・子育てについて学習する機会の少ない保護者にとっては、大変参考になり、毎回楽しみにしている方も多い。

３　課題と今後の展望

・貧困が原因で相談に来られる事例はないが、貧困がベースになっている相談事例や様々な問題が複合的につながっている事例が多い。（いじめ、不登校、発達障害、シングルマザー、ＤＶ、虐待等）相談を重ねるにつれ、相談者との信頼関係ができ、貧困問題に話が発展する事例もある。
・貧困問題を含む相談事例の場合は、適切な機関と連携して対応する。
・今後、貧困問題がベースとなった相談対応も考えられるため、市の福祉担当課やその他関係機関との連携を一層強めたいと考えている。

【取組事例６】

吉中未来塾

－地域人材を活用した多様な学習機会の充実－

【視点】

学校が核となり地域を巻き込んだ取組　学習支援　進路保障

取組団体名	宇和島市教育委員会 吉中未来塾
	〒799-3707　宇和島市吉田町鶴間新 200
代 表 者 名	塾長　西村久仁夫（学校長）
活 動 場 所	吉田中学校校内（主としてパソコン室）
対　象　者	全校生徒（希望者）　参加生徒 30 名（開講式）
実施日時等	週３回程度　１回２時間程度
活動資金等	参加費：無料　宇和島市課外学習指導事業 学校・家庭・地域連携推進事業（学校支援地域本部）

１　趣旨・目的

吉田中学校の校区である吉田町は、基幹産業である農漁業の停滞とともに人口減少が進んでいる。吉田中学校でも保護者の所得低下や、それに伴う人口流出による生徒数の減少などが課題となっている。生徒数の減少は、生徒にとっての多様な考え方に触れる機会や、学び合い切磋琢磨する機会が少なくなりやすく、教師にとっても多様な学習・指導形態をとりにくい状況を生む。

吉田地域は、学校に対して協力的で、学校への期待も大きい。また、教員ＯＢが多く、潜在的教育力も高い。しかし、連携・協働する体制がないため、その教育力を生かし切れていないのが現状である。

そこで、本年度、学校支援地域本部を立ち上げ、地域コーディネーターを中心とした学校支援体制を整えるとともに、放課後の時間を活用して、吉田中生の夢（進路）を実現し、地域の将来を担う人材を育成するために、学習講座（それぞれの夢や希望に応じた進路実現を目指した勉強会）を開催することとなった。

２　活動の内容

（１）　講座の概要

進路実現講座	国際化講座	地域創生講座	産業創出講座
・基礎学力向上 ・補充発展学習 ・自主学習 ※各種検定の実施	・英語講座 ・英語 de おもてなし講座 ※コンシェルジュの養成	・郷土学習 ・活力創造講座 ※地域創生構想の立案	・キャリア教育 ・産業創出構造

・平成 28 年９月 20 日からスタートした。
・週３回（火・木・金）程度、１日２時間の講座を実施する。１日１講座だけの参加でも構わない。
①16：20～17：00　　②17：10～18：00
・地域コーディネーターが全校生徒を対象とした参加希望書を作成し、学級担任が生徒に配布・回収する。回収した希望書は、地域コーディネーターがとりまとめ、参加者を把握する。
・進路実現講座を中心に実施する。

（２） 地域人材を活用した支援スタッフ

国際化講座では吉田町国際交流協会、進路実現講座の学習支援では愛媛県教育会吉田支部、愛媛県退職公務員連盟吉田支部など、地域にある教育関係団体と連携し運営している。また、今後地域創生講座では、みかん研究所や水産研究センター、地域の公民館と連携して取り組む予定である。

（３） 地域の力ですべての子どもを伸ばす

① 生徒が変わる

「吉中未来塾」という名前は、生徒たちが相談し、決定した。毎週３回程度開催し、平均約 15 名の生徒が参加して意欲的に取り組んでいる。今後、産業創出講座では、子どもたちで吉田町活性化プランを作成し、保護者や地域に向けて発表する場を設ける予定にしている。

参加者の中には家庭環境により、通塾することが叶わない生徒が含まれており、本事業はそういった生徒の進路選択の可能性を広げることのできる支援となっている。

② 保護者が変わる

吉田町には塾が少なく、進学塾に通おうとすると宇和島市まで 30 分かけていく必要がある。吉田中学校区では主幹産業の柑橘栽培に従事している保護者が多く、出荷時期になると夜遅くまで出荷作業に従事している。そのため塾への送迎ができず、通わせたくても通わせることができないという家庭も多い。未来塾の開講には、そういった悩みを持つ保護者から、喜びの声が寄せられている。また、学校が学力向上に真剣に取り組んでいるということが伝わり、安心につながっている。

③ 地域が変わる

開講にあたっては、校区の組長に依頼し、町内全戸に新聞を回覧して周知した。開校式には、新聞社の取材もあり、記事を目にした地域の方から「始まったなあ。」と声をかけられ、地域の関心の高まりも感じられた。

３　課題と今後の展望

（１）　課題

・今後は、コミュニティースクールの導入、学校支援地域本部の本格実施を目指し、組織的・継続的な仕組みづくりに取り組む必要がある。

・学校と地域が目標ビジョンを共有して取り組んでいくためにも、校内研修を充実させ、全教職員で地域とともにある学校づくりを進めたい。

・運営の鍵は、コーディネーターにある。質の高い活動を展開するためにも、コーディネーターの育成は欠かせない。研修に参加するための予算が必要である。

（２）　今後の展望

・活動を継続させるためには、予算の裏付けが必要である。

・子供の貧困対策については、福祉分野での公的支援の拡充や社会教育分野での幅広い事業展開が必要であると考える。